

千葉看護学会 第25回学術集会講演集

メインテーマ

看護実践を変えるデザイン力

—アクションとしての研究を考える—

と き：令和元年9月7日（土）

ところ：千葉大学看護学部(千葉大学亥鼻キャンパス)

千葉市中央区亥鼻1丁目8番地1号

学術集会会長：黒田 久美子

事務局 千葉大学大学院看護学研究科内
〒260-8672 千葉市中央区亥鼻1-8-1
FAX: 043-226-2463
E-mail: cans25-gakkai@umin.ac.jp

教 育 講 演

在地の自覚

—実践と研究の区分をこえて—

講 師：安藤 和雄（京都大学東南アジア地域研究研究所）

座 長：清水 安子（大阪大学大学院 医学系研究科）

在地の自覚－実践と研究の区別をこえて－

京都大学東南アジア地域研究研究所 安藤和雄

要旨（注1）

生きることは、積極的であれ消極的であれ、何らかの選択をすることである。困難と対峙し困難の克服を目的化した時に、生きようとするエネルギーが身体の中から湧いてくる。これは一般的にも多くの人々の賛同を得る人生哲学であろう。私もそう思っている一人である。困難との当事者的関係の成立こそが、生きようとするエネルギーを呼び起こすともあると言えよう。「困難や障害にうちかち、それをとりのぞこうとすること」を「実践の要求」と呼ぶ（注2）。実践という言葉を使って表現される行動や行為を、私も、そう定義したい。岩崎武雄が主張するように、実践的立場にたつということは、人間の立場にたつて、自己の実存の立場からいかに行為すべきかという考察を加え、価値判断をくだすことである（注3）。困難や障害という問題の克服を目指すことが実践的立場かつ当事者的立場であり、困難や障害という問題の論理的説明のみに目的を限定することは傍観者の立場である。傍観者的に問題と対峙した時には、生きようとするエネルギーは身体の内側からわいては来ない。生きることの醍醐味は、生きようとするエネルギーを実感し、そのエネルギーを使うことである。したがって問題という現象を説明するという「抽象的な行為」にあるのではなく、問題を身体をともなった行動によって克服しようとする「具体的な行為」にあると言えよう。実践はエネルギーを要する行為でもあり、実践は結果として人々を活気づける。

京都大学東南アジア地域研究研究所が重視するフィールドワークによる地域研究が他の既存学問と大きく異なる点は、研究対象となる地域あるいは場に足を踏み入れることを大原則としていることにある。場に身体を置くことから、場が抱える問題とでも言える、場に暮らす人々が直面する問題を無視できない状況に研究者は自己を追い込んでいくことになる。自ずと研究者は実践的立場をとらざるを得なくなる。いい意味で、精神的に逃げ場のない退路をたたれた状況に足を踏み込んでいくことが、フィールドに行くということになろう（注4）。フィールドワーカーである地域研究者は、多くの場合、最初から問題と当事者的に対峙しているわけではなく、問題を主体的に自ら探り当てるといよりは、問題が主体的に「わたし」であるフィールドワーカーにある時に飛び込んできて、直観的に分かる場合が多い。私はこの場における直観的に理解する心を「在地の自覚」と呼んでいる。意識する、しないにかかわらず、人々が生活する場に入った外部の人である「わたし」には「在地の自覚」がすでに備わっているのである。盤珪は、彼の法話を聴きにきた寺院の建物内の聴衆に向かって、寺院の外でない鳥の鳴き声が、法話に耳を傾けているその時にでも、聞こえていると云い、仏心は誰にでも備わっていると説く（注5）。人が抱える問題に寄り添おうという心があるからこそ、人は人を受け入れる、それが人間が社会性を営む源であると私は考えている。だから、「在地の自覚」という心は、あたかも、盤珪がとく仏心のようなもので不生である、と言えるだろう（注6）。それをいかに実感するかである。

こうした問題意識から実践型地域研究推進室が 2008 年度に、当時の京都大学東南アジア研究所情報ネットワーク部に設立された。オーソドックスな地域研究が「地域とは何か」を分析的に描き出そうとするのに対し、「実践型地域研究」の目的はあくまで実践を通じて地域を理解し、地域が理解されることで実践が促進されるという実践と地域理解の関係を目指している。つまり、実践そのものが研究である地域研究である。実践と研究を一体化させ、実践の中に研究の主体（目的）と客体（問題）が存在し、研究者である「わたし」と問題に直面している地域の人々が、主体と客体ではなく、実践における主体と主体という協働関係によって行う「当事者」が行う地域研究とも言える。

(注 1) 本要旨は、安藤他 2016 「実践哲学を基礎とした東ブータンにおける相互啓発実践型地域研究の試み—京都大学国際交流科目『ブータンの農村に学ぶ発展の在り方』現地スタディーツアー 2015 年度報告集—」、ヒマラヤ学誌：40-76、収録されている 安藤和雄 「1. はじめに：参加型地域研究としての相互啓発実践型地域研究の手法確立を求めて」の「実践と地域研究」から抜粋、加筆したものである。

(注 2) 思想の科学研究会 2012『新版 哲学・論理用語辞典 新装版』三一書房：194-195.

(注 3) 岩崎武雄 1977『存在論・実践論 [哲学体系 第二・三部]』東京大学出版：181-192.

(注 4) 安藤和雄 2015「場における当事者的関係性が進める実践型地域研究」『京都大学東南アジア研究所 50 周年記念 21 世紀の東南アジア研究—地球社会への発信』東南アジア研究所：103-105.

(注 5) 玉城康四郎 1982『盤珪禅師法語』（禅の古典 8）講談社：65.

(注 6) 「不生とは不生な仏心、即ち親から生みつけて授かった仏心であり、それは生得のものであって後天的に得たものではなく、その点不生であり、不生のものであるから霊明なものであるという。不生のものは同時に不滅のものであるはずであり、盤珪は不生と言えば不滅と言う必要はないとし、不生不滅とは称しなかったが、不生禅の不生には不滅の意味を同時に含んでいることはいうまでもない。」（古田紹鉄 「解説 不生禅」『盤珪禅師語録』（鈴木大拙 編校）2007（1941）＜岩波文庫＞岩波書店：285-294）

<プロフィール>

愛知県出身。静岡大学農学部農学科卒業後、青年海外協力隊員（稲作）としてバングラディッシュに 2 年 8 ヶ月赴任。帰国後、京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻入学、修士・博士課程修了。この間、バングラディッシュ農業大学大学院（栽培学科）留学、JICA の長期専門家（農村開発）としてバングラディッシュに通算 7 年間赴任。京都大学研修員を経て、京都大学東南アジア研究センター助教授、京都大学東南アジア研究所准教授を経て現職：東南アジア地域研究研究所実践型地域研究推進室・室長（教授）。東南アジア研究センター就職後はバングラディッシュに加えて、ミャンマー、ラオス、雲南、東北インド、ブータンのフィールドワークに従事し、2008 年以降特に大学の教員・学生の直接参加によるアクション・リサーチとして行う実践型地域研究を東ブータン、滋賀・京都で実施している。

当日は、会場内に学会広報による写真撮影が入ります。
何卒ご了承くださいませようお願い申し上げます。

千葉看護学会第25回学術集会講演集

令和元年 8月発行

発行所 千葉看護学会第25回学術集会事務局

〒260-8672 千葉市中央区亥鼻1-8-1

F A X : 043-226-2463

発行責任者 千葉看護学会第25回学術集会会長 黒田 久美子
